

2 万葉の島沙弥

瀬居島と沙弥島は、どちらも、もとは無人島で、瀬居島は本島の移民で開かれたが、沙弥島は与島の人が開いた島である。島の開発は少しばかり沙弥島が古く、正保元年、与島の岡崎次郎左衛門が自分の息子、庄兵衛を分家さすために開いたのが、そもそもこの沙弥に人がすみついたはじまりで、今から三百七十年ほど前の話である。

なにぶん回りが二キロメートル足らず、島の南北で九百メートル、東西の幅の広い所で百六十メートルという狭い島だから、いささか、隣の瀬居島より早く開けながら人口は増加しなかった。幕末に近い文政年間に、ようやく民家は八軒となり明治になって十七軒と部落の成長も瀬居島とはよほど格差ができてきたものだ。

ところが、長く無人島のまま放置されていたとはいえ、それはただ定住に不適というだけで、古くから人間の生活圏であつたことはもちろんである。島の中田

浜という砂浜からは、先史時代の石器や縄文式土器の破片すら発見されるのだ。それに千人塚と呼ばれる古墳があるのもこの島としては珍しい。

しかもこの塚のことであろう。万葉の歌人柿本人麿が、歌に詠じているのは……。旅の空であつたらう。当時、人麿は、今の丸亀の中津から船に乗って東に向かった。その時風波も荒くどこかへ避難しようとして、船を着けたのが、この沙弥島であつた。

その時のことが、万葉集巻二に載っている。

讃岐の国狭岑島に石中の死人を視て作れる歌一首ならびに短歌……というのがそれだ。

多くの歌がある中で万葉に載った讃岐の歌というのは、この沙弥島を詠じたものの以外にない。だから、いわば沙弥島は讃岐における万葉の島といえるのだ。

「玉藻よし讃岐の国は国柄か、見れども飽かぬ神柄か……あちこちの島は多けれど、名ぐはし狭岑の島……」

という書き出しの長歌で、塚に寝る死人の霊を弔う歌である。その中で、人磨は、こんなところに葬られた人はいったいどこの人だろう。その人にも妻や家族があったろう。妻もあればさぞかし弔問もしたかつたであろう…などという気持を歌ったのだ。

その長歌のつぎに反歌がよまれている。

・妻もあればつみてたげまし佐美の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや

・奥つ波来よる荒磯を敷妙の枕とまきて寝せる君かも

いまこの荒磯の自然石に、柿本人磨碑と刻んだ記念碑が立っている。

つまり、このあたりが海波の難を避けた人磨の、かり小屋をしつらえたところだろうと考えられている。

夕さればさみねの島になく千鳥荒磯道に汐やひくらむ

夫木和歌集